創刊の辞

名古屋学院大学学長 木 船 久 雄

平成18年12月に改正された「教育基本法」の第7条では、大学の社会的使命を次のように謳っている。いわく「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」である。これによって、大学の使命として、それまでの①教育、②研究に加え、3つ目の③社会貢献が明示された。

このため、昨今では大学が行う社会的活動が注目を集めるようになった。本学も地域と共に歩む大学として、地域連携センターをコアとしながら、様々な連携形態を用いて地域社会への貢献事業を展開している。しかし、①教育、②研究がこれまでも、そして今後も大学の変わらぬ2大ミッションであることは疑いない。大学は、教育という「知の伝承」を通じて人材を育成し、研究という「知の創造」を通じて真理の探究を進める場であり続ける。その成果をもってして、社会に貢献するというのが基本法の精神であろう。大学研究者が、社会に背を向け象牙の塔にこもる態度は否定されようが、寝食を忘れて研究に勤しみ、その成果を社会に問う姿は奨励されるべきものである。

しかし、大学研究者たちの研究環境は日ごと厳しさを増している。長い歴史があるにも拘わらず、新規会員の確保が難しく、財政的危機を前に存続が危ぶまれる学会組織は少なくない。多くの国公立大学では、大学から支給される研究費が毎年のように減額され、外部の研究資金をどう調達するかに頭を悩ませる研究者の話は、日常茶飯事だ。さらに、研究成果を公開する場としての出版事情も、悪化の一途を辿っている。

そうした状況下にあっても、本学は研究者の成果発表の場や機会を確実に担保したいと思う。研究論文は、研究者本人の分身であり生きてきた証であるとともに、研究者仲間を刺激し、さらに研究を深め、研究を醸成させる基本的手段だと考えるからである。

この度、『名古屋学院大学論集「医学・健康科学・スポーツ科学篇」』を創刊することになった。これは、本学が刊行する紀要としては、「社会科学篇」、「人文・自然科学篇」、「言語・文化編」および『研究年報』に続く、第5番目の論集である。本学における大学紀要充実の歴史は、大学の発展（学部、教員研究者数）と軌を一にし、そこに集う研究者たちの活動を保護し、鼓舞してきた証左でもある。

具体的に確認してみよう。『名古屋学院大学論集』第1巻は、大学開設と同時（1964年）に刊行され、その第7巻目（1970年）から「社会科学篇」と「人文・自然科学篇」とに分冊された。『研究年報』は1988年から発刊され、外国語学部の設置期には「言語・文化篇」（1990年）が増補さ

れている。

それまで、本学は社会科学系の学部を中心に構成される大学であったが、2006年4月に初めて理系色の濃い人間健康学部を設置した。これは、少子高齢時代を迎え、健康・医療・福祉・スポーツ分野に携わる人材育成と研究が、現代そして将来にわたり社会全体の大きな課題であり、本学はその課題に応えるべきだと考えたからである。その後、当該学部はスポーツ健康学部とリハビリテーション学部に発展的に分割改組され（2010年）、今日に至る。

この『名古屋学院大学論集「医学・健康科学・スポーツ科学篇」』は、主として、こうした新しい学部で精励されている研究者たちの成果発表の場として位置づけられる。理系色の強い新しい学部とそこを根城とする研究者たちは、本学に爽やかな新風をもたらし、学内を大きな刺激を与えてくれている。彼ら彼女らが持つ専門分野の知見は、社会科学の研究者たちにとっては新鮮で興味深い。なにより、日常の教育・研究スタイルも社会科学系のそれとは異なり、示唆されることが多い。

本学は、研究・教育・社会貢献という大学の3つのミッションを堅持し、各々のミッションにおいて着実にその成果を上げ、それを世に問うていきたいと思う。この論集が、大学の研究ミッションを遂行する上で、大きな役割を担ってくれるものと期待する。欲を言えば、本論集が、常にクオリティの高い論文を掲載し、広く世界の耳目を集めるような学術雑誌に成長してくれることを願うものである。

2012年8月1日